



大学生の授業外学習時間確保に向けた方策 東北 大学スペイン語教育における実践報告

著者	志柿 光浩, 三宅 禎子
雑誌名	東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要
巻	4
ページ	507-517
発行年	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/10097/00123131

【報 告】

大学生の授業外学習時間確保に向けた方策 —東北大学スペイン語教育における実践報告—

志柿光浩^{1)*}、三宅禎子²⁾

1) 東北大学大学院国際文化研究科,

2) 岩手県立大学高等教育推進センター, 東北大学高度教養教育・学生支援機構非常勤講師

受講している授業に関連して日本の大学生が授業外学習に費やす平均的な学習時間は、単位制が前提とする時間数に対して著しく少なく、東北大学生も例外ではない。大学が認定する単位の国際的互換性確保の意味でも、十分な授業外学習時間を確保することは日本の大学が取り組むべき重要課題である。教養教育におけるスペイン語の授業を担当する筆者らは従来から、目標として設定したレベルのスペイン語運用能力の獲得には授業以外での十分な学習が不可欠であるという認識に立ち、受講学生が授業外でスペイン語の学習に取り組むようさまざまな方策を講じ、成果を挙げてきた。本稿では、大学における授業外学習時間の基準と実態について概観した後、筆者らの成果とそれに向けて行なってきた取り組みについて報告する。特に反転授業の概念に基づく授業設計、授業外学習を前提とした評価、授業外学習の促進に向けた足場がけといった取り組みについて報告する。

はじめに

日本の大学の学生が受講科目に関して授業時間外に費やす平均的な学習時間¹⁾が大学設置基準に定めた水準に対して不十分であることはつとに指摘されているとおりである。後述するように東北大学学生も例外ではない。この問題について東北大学学務審議会、高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター編(2016:12)による報告書は次のように述べている。

大学生の学修時間（単位修得につながる授業内外の学習時間）が短いことに対する憂いは昔から聞かれるが、とりわけ近年では、国際的な教育の質保証の文脈から争点となっており、中央教育審議会（2012）の答申でも中心的な話題として取り上げられている。

ただこの問題は、上記答申でも指摘されている通り、単に学生の授業外学修を促すことで解決するものではない。授業外学修が可能になるような教育課程の編成が必要であり、何より授業担当者が単位制を意識した目標の設定を行い、授業設計をすることが求められる。

東北大学で20年以上にわたりスペイン語教育に携わってきた筆者らは、外国語の習得には十分な時間をかけて目標言語に接することが不可欠であるという外国語教育の基本原則に従い、授業時間外での学習時間の確保に特に配慮した指導実践を行ってきた。その結果として、筆者らの担当する授業を受講する学生の授業外学習時間は東北大学全学教育科目の平均的な水準を上回る状況が続いている。上記報告書がその必要性を指摘する、単位制を意識した目標設定と授業設計を筆者らは実践してきたと自負している。本稿では、筆者らが実践してきた指導方法について報告し、授業外学習時間の確保を通じた大学教育の改善に貢献することを目指す。なお、本稿は東北大学全学教育の授業を対象としている。

1 大学における授業外学習時間

1.1 大学設置基準の定める授業外学習時間

先に引用した東北大学学務審議会、高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター編（2016）の報告書では、東北大学授業担当者の間で授業外学習時間の現状がほとんど把握されておらず、また十分な学習時間が想定されていないという問題点が指摘されている

*) 連絡先：〒980-8576 仙台市青葉区川内41 東北大学大学院国際文化研究科 mitsuhiro.shigaki.a8@tohoku.ac.jp

(pp.17-18). このことを踏まえ、まず改めて日本の大学が前提とすべき授業外学習時間について確認しておきたい。

文部科学省ウェブページに次のようなQ&Aの記述がある²⁾。

Q3 日本の大学の現状について、「授業に出席しなくても単位が取れる」「勉強しなくても簡単に卒業できる」などの声を耳にしますが、これについて大学はどのような対策を講じているのでしょうか。

文部科学省が、自ら設定したこの問いに対して示している回答は以下の通りである。

我が国の大学教育は単位制度を基本としており、1単位あたり45時間の学修を必要とする内容をもって構成することが標準とされています。ここでいう1単位あたりの学修時間は、授業時間内の学修時間だけではなく、その授業の事前の準備学修・事後の準備復習を合わせたものとなっています。(以下省略、同ウェブページ)

同ウェブページではその上で、大学設置基準、昭和三十一年文部省令第二十八号、平成二十九年五月一日公布、第六章 教育課程（教育課程の編成方法）第二十一条を根拠として掲げている。第二十一条の条文は、卒業論文などに関して規定した第3項を除くと以下のとおりである³⁾。

第二十一条 各授業科目の単位数は、大学において定めるものとする。

2 前項の単位数を定めるに当たっては、一単位の授業科目を四十五時間の学修を必要とする内容をもって構成することを標準とし、授業の方法に応じ、当該授業による教育効果、授業時間外に必要な学修等を考慮して、次の基準により単位数を計算するものとする。

一 講義及び演習については、十五時間から三十

時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。

二 実験、実習及び実技については、三十時間から四十五時間までの範囲で大学が定める時間の授業をもつて一単位とする。ただし、芸術等の分野における個人指導による実技の授業については、大学が定める時間の授業をもつて一単位とすることができる。(原文ママ)

さて東北大学全学教育初修外国語の1年次を対象とした基礎科目は現在1クォーター（8週間）に90分の授業16回（計24時間）行うことで1単位としており、上記大学設置基準に従えば全体で45時間の学習時間を要する前提であるから、授業外での学習時間は21時間を要することになる。また平成30年度よりは2年次を対象とした展開科目でもクォーター制が導入され、こちらでは90分の授業を8回（計12時間）行うことで1単位としていることから、授業外での学習時間は33時間を要することになる。週あたりに換算すれば週2回の授業がある基礎初修語科目の場合は週約3時間、授業が週1回の展開初修語科目の場合は週約4時間の学習をそれぞれの科目に関連して授業外で行うことが前提とされていることになる。これが大学設置基準の定める授業外学習時間の量である。初修外国語以外の全ての科目についても同様のことが当てはまる。

1.2 日本の大学生の授業外学習時間

上述のとおり、日本の教育を統括する文部科学省が自らのウェブサイトで日本の大学の現状について、『授業に出席しなくても単位が取れる』『勉強しなくても簡単に卒業できる』などの声を耳にします」と述べているわけで、日本の大学生たちが総じて十分に勉強していないことは公に認められた事実である。この問題は平成24年8月28日付け中央教育審議会答申（中央教育審議会 2012）でも「5.学士課程教育の現状と学修時間」として取り上げられ、次のような指摘がなされている。

本審議会が学士課程教育の質的転換への好循環の始点として学生の学修時間の増加・確保に着

目したのは、我が国の大学生の学修時間が諸外国の学生と比べて著しく短いという現実を改めて認識したからに他ならない。大学制度において、前述のとおり 1 単位は授業前後の主体的な学修を含めて45時間の学修を要する内容で構成することが標準とされている。この単位制度は学修の主体性という大学における学修の本質に基づく仕組みであるとともに、体系的な教育課程と不可分に連動している。(pp.11-12)

答申の審議資料および答申の添付資料では大学生の授業外学習時間について東京大学大学経営・政策研究センターが2007年に実施した全国大学生調査のデータが引用されている⁴⁾。

この調査の「問17 典型的な1週間の平均的な生活時間を、学期中と休暇中の別に教えてください。」という設問における「授業・実験の課題、準備・復習」の項目に関する回答結果は図1に示した通りであった。

学期中、授業に関連した学習を全くしないと回答した学生が全体の12.9%、1週間に1～5時間と答えたものが全体の51.2%を占めている。上述のように演習科目で週3時間程度、講義科目で週4時間程度の関連学習が想定されていることからすると、そのような前提に対して日本の大学生の授業外学習時間は著しく少ないことが分かる。

同答申ではこのほか、日本の大学生の授業外学習時間はアメリカの大学生と比べても少なく、また著名な

大学でも同様の傾向があることを示す資料が示されている(中央教育審議会 2012: 58-60)。

1.3 東北大学生の授業外学習時間

東北大学が実施している全学教育を対象とした「学生による授業評価」で、各授業に関連する学習時間についての設問が定量的なものになったのは平成25年度以降である。

「A-3 授業時間以外に、この授業に関連する学習を週平均でどの程度しましたか?」という問いに対して、以下の5つの選択肢が設定されている⁵⁾。

- 1 全くしなかった
- 2 30分程度
- 3 1時間程度
- 4 2時間程度
- 5 3時間程度以上⁶⁾

次ページ図2は、平成25年度後期と平成28年度後期の全学教育科目全体に関する回答の数値をグラフにしたものである。

選択肢の5を選択した者については学習時間を3時間とみなして平均学習時間を計算すると、平成25年度後期が0.67時間(約40分)、平成28年度後期が0.74時間で(約45分)と若干長くなっている。何れにしても全学教育科目の個々の授業についての授業外での学習時間を平均すると週あたり40分～45分であり、大学設置

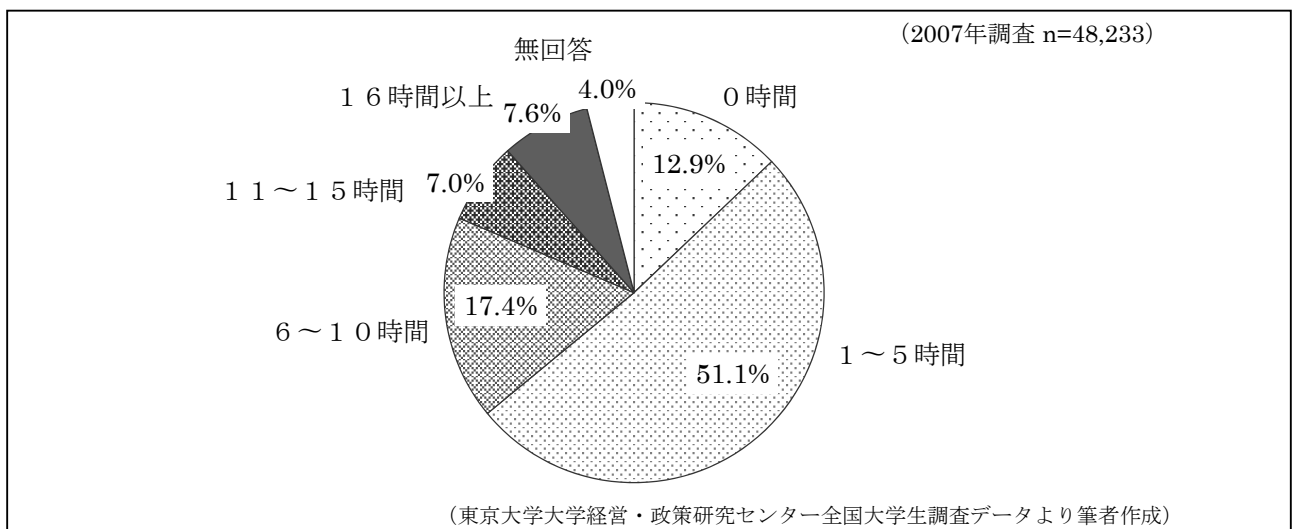


図1 日本の大学生の「授業・実験の課題、準備・復習」時間(1週間)

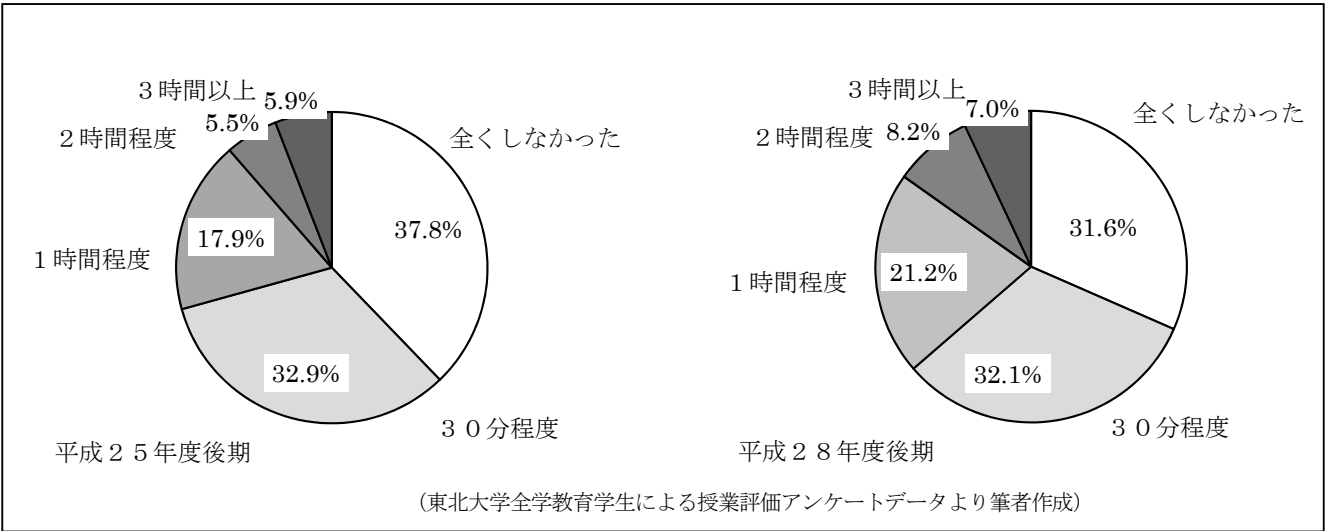


図2 東北大学生の授業外学習時間（全学教育授業1科目あたり1週間）

基準で想定されている授業外での学習時間には遠く及ばない。また、この4年間で若干改善してはいるが、授業外での学習を全く行わなかったという回答が全体の3割を占めている。東北大学の場合も、受講科目に関連した授業外学習時間は十分ではない。

上記の数値をさらに学問領域別にみてみよう。図3は平成28年度後期の全学教育授業評価の領域別の平均値をグラフにしたものである。理科実験については筆者らの担当するスペイン語の授業の学生たちの中にも、レポートの作成のために徹夜をしている者が少なくなく、多くの授業外学習時間が求められていることは想像に難くない。各領域と合わせてスペイン語科目の平均も同時に示したが、理科実験の値を除いては、

スペイン語科目の履修学生が授業外の学習に取り組んでいる平均時間数が他の領域の値に比べて高いことが分かる。

次ページ図4は外国語科目について語種ごとの授業外学習時間の平均値を示したものである。外国語科目の中でもスペイン語の平均値が相対的に高いことが示されている。スペイン語科目については、シラバスでも週4時間の授業外学習が必要であることを謳うなど、担当教員の間で授業外学習の重要性を共有することに努めてきた。その成果が一定程度現れていると考えられる。

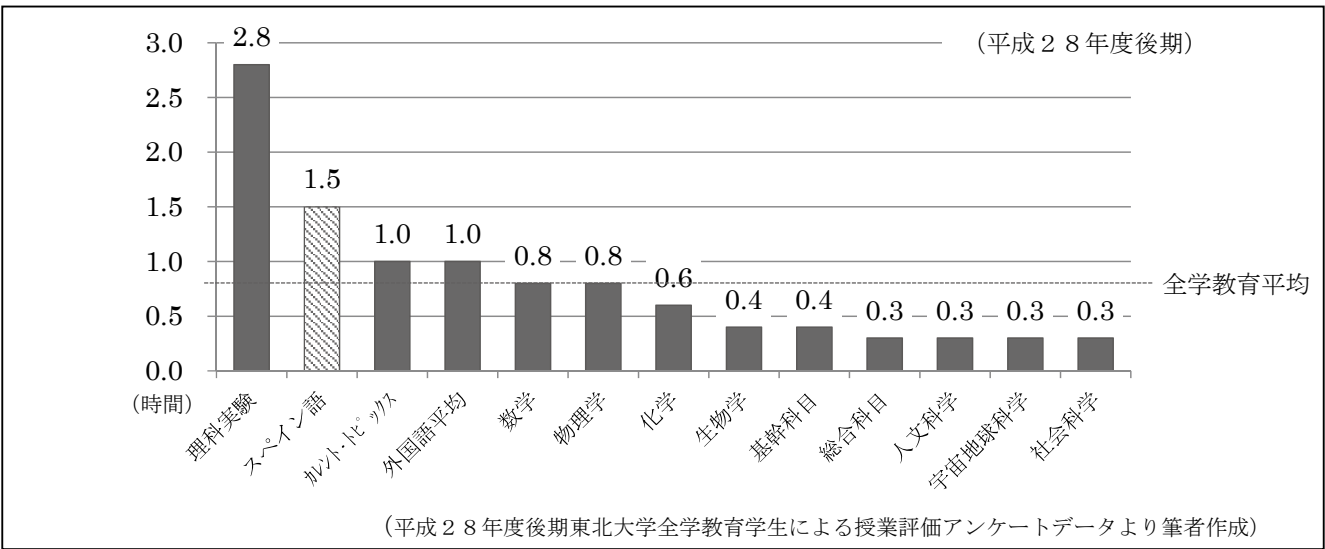


図3 東北大学生の授業外学習時間（全学教育領域別1科目あたり1週間）

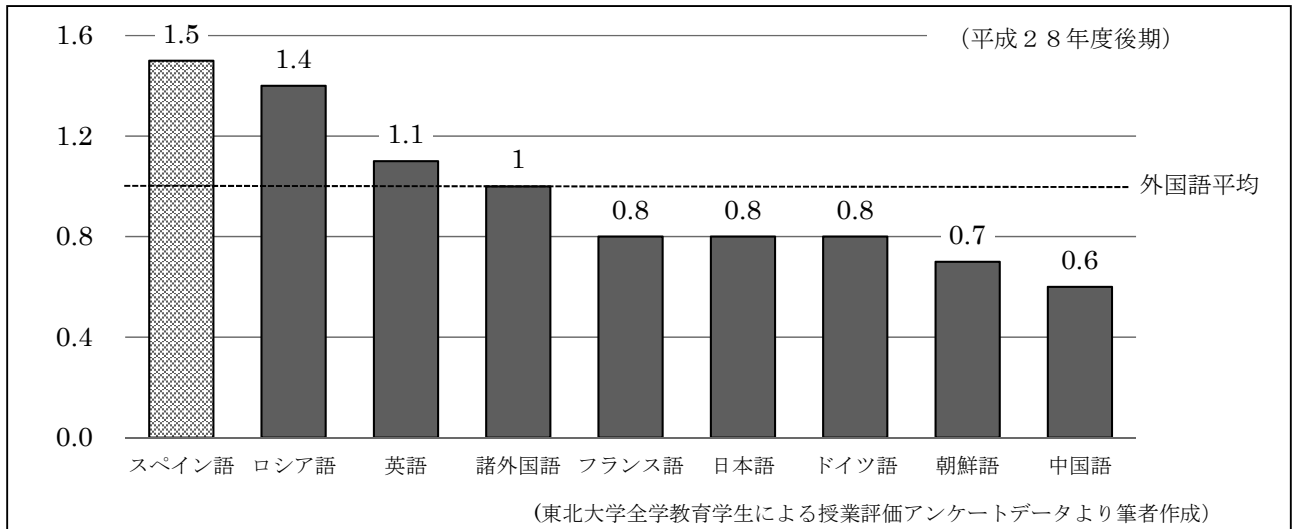


図4 東北大学生の授業外学習時間 (外国語語種別1科目あたり1週間)

2 筆者らが担当するスペイン語科目受講生の授業外学習時間

筆者らは外国語の習得には十分な時間をかけて目標言語に接することが不可欠であるという外国語教育の基本原則に従い、授業時間外での学習時間確保に特に配慮した指導を行ってきた。図5に示したとおり東北大学で筆者らが担当する授業を受講する学生の授業外学習時間はスペイン語、外国語、全学教育全体のそれぞれの平均的な水準に比べて長くなっている。

このことは別の見方をすれば、筆者らが担当する授業は、授業外での学習に取り組まなければ単位が認定されにくい授業だということであり、学生たちが口にする「楽勝科目」の逆である。実際、授業評価アンケー

トの自由記述欄には「宿題が多すぎる」「テストが多すぎる」というコメントも見られる。

しかしながら、筆者らの担当する授業に関する設問「C-12 この授業を総合的に判断すると、どんな評価になりますか?」の回答傾向は相対的に高い。次ページ表1、図6は設問A-3の回答結果に基づく授業外時間の平均値と設問C-12の回答を0から4までの数値に換算した値の表とこれを用いて散布図を作成したものである。図の右上に行くほど、労多くかつ高い評価を得ていることになる。授業外での取り組みの度合いが高いことが、一定の成果を生み出していると言えよう。

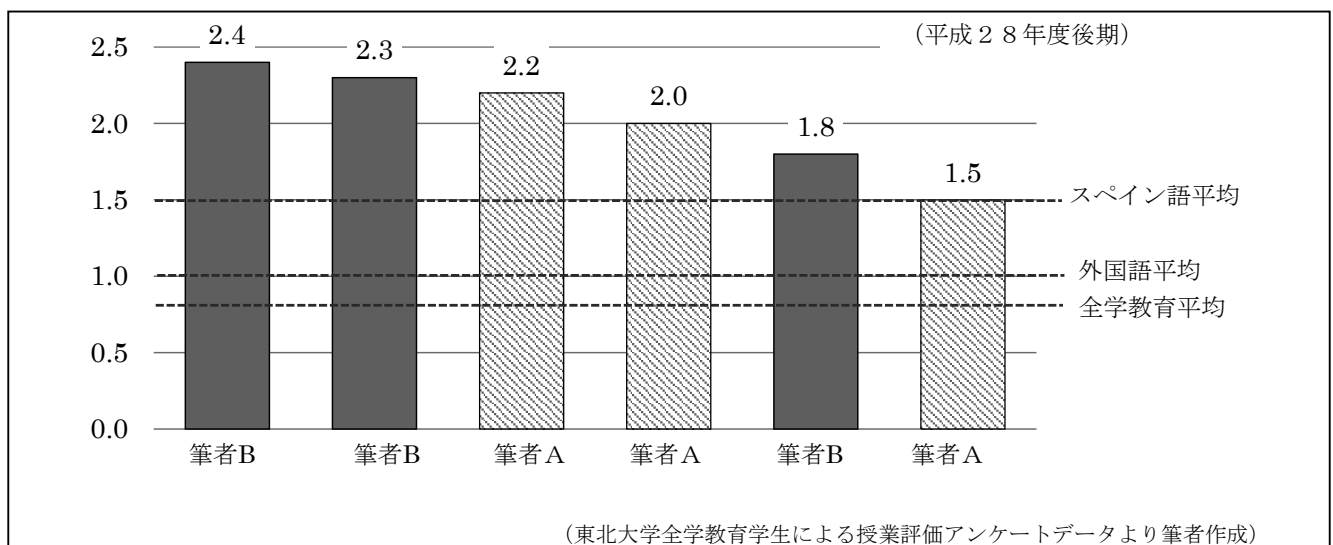


図5 筆者ら担当科目受講生の授業外学習時間 (1週間)

図 6. 1 2 指標による授業評価の概念図

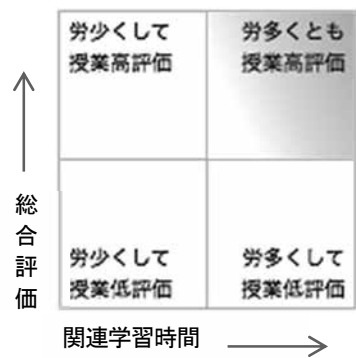


表 1. 1 全学教育各領域の 2 指標の値
(平成28年度後期)

科目	A3 (n)	A3平均	C12 (n)	C12平均
基幹科目	3, 293	0.4	3, 589	3.1
人文科学	1, 158	0.3	1, 406	3.3
社会科学	1, 224	0.3	1, 572	3.3
数学	2, 379	0.8	3, 983	2.9
物理学	1, 002	0.8	2, 334	2.9
化学	1, 090	0.6	1, 718	2.8
生物学	283	0.4	1, 194	3.1
宇宙地球科学	834	0.3	827	3.0
理科実験	699	2.8	769	2.5
総合科目	157	0.3	251	3.3
カルト・ビックス	955	1.0	817	3.3
外国語全体	10, 329	1.0	11, 439	3.2
スペイン語	610	1.5	651	3.4

(全学教育学生による授業評価アンケートデータにより作成)

図 6. 2 全学教育各領域の 2 指標による散布図
(表 1.1による)

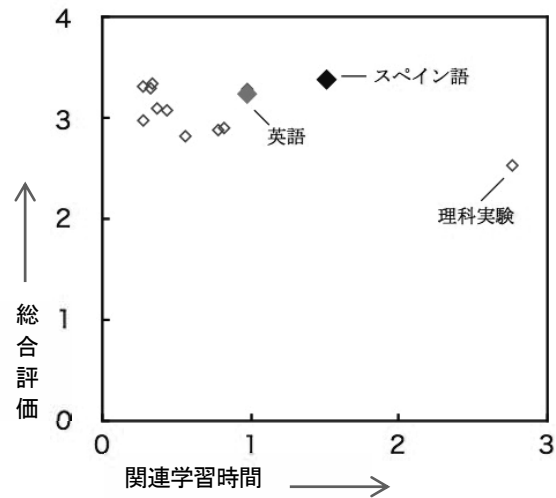
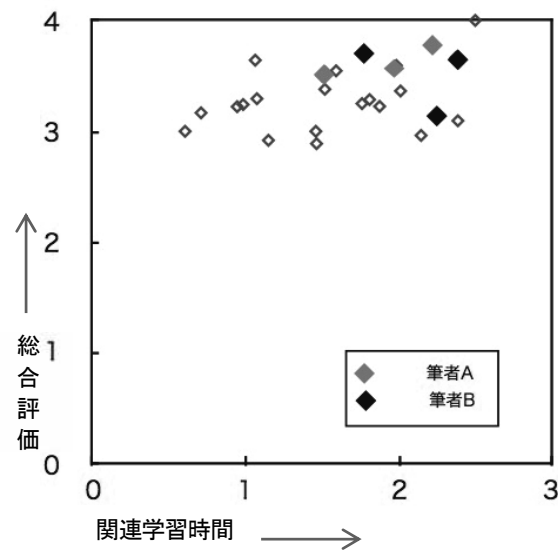


表 1. 2 スペイン語各クラスの 2 指標の値
(平成28年度後期)

担当者	A3 (n)	A3 平均	C12 (n)	C12 平均
	2	2.5	2	4.0
筆者B	8	2.4	9	3.7
筆者A	25	2.2	25	3.8
	22	2.4	21	3.1
筆者A	32	2.0	32	3.6
筆者B	21	2.3	20	3.2
筆者B	17	1.8	17	3.7
	43	2.0	33	3.4
	24	2.1	27	3.0
	40	1.9	40	3.2
	21	1.8	21	3.3
	33	1.6	33	3.5
	25	1.8	24	3.3
	28	1.5	28	3.5
筆者A	6	1.5	6	3.5
	29	1.5	29	3.4
	40	1.1	39	3.6
	12	1.5	11	3.0
	27	1.5	27	2.9
	34	1.1	34	3.3
	30	1.0	29	3.2
	36	0.9	36	3.2
	37	1.1	37	2.9
	12	0.7	12	3.2
	24	0.6	24	3.0

(全学教育学生による授業評価アンケートデータにより作成)

図 6. 3 スペイン語各クラスの 2 指標による散布図
(表 1.2による)



3 筆者らの指導実践

3.1 反転授業を前提とした授業設計

「反転授業 (flipped classroom)」という概念が近年注目を浴びている⁷⁾。「授業で新しいことを学び、それを宿題で確認・強化する」というのが従来の授業に関する一般的なイメージであったとすれば、そうではなく、授業に来る前に課題に取り組み、授業では課題に取り組んだ成果をもとに仲間とともにその成果に基づいた活動を行いつつ学習を進める、という考え方である。

予習が重要な意味を持つ傾向がもともと強かった外国語の授業は「反転授業」の要素を本来的に備えていたと言える。ただし従来の外国語の授業は文字テキストを前提とする傾向が強かったことから、課題となる文章を前もって読み、語彙を調べ、訳をしてくるといったイメージが強かった。

これが音声でのやりとりを中心にすえた授業になると、文章を読み、単語を調べるといった活動に加えて、音声・映像を繰り返し視聴し、発話練習を行うという活動も必要になる。語彙や文法事項についても書いて処理できるレベルから、音声レベルでの処理が必要となる。そのような訓練を授業外で積んだ上で、授業ではクラスメート、ティーチングアシスタント、教師らと音声でのやりとりを実際に行ってみたり、授業外学習で理解できなかったことなどを質問するといった活動を行う。授業外学習の成果を授業の中で活かしながら学習を進めるというイメージである。筆者らの授業設計もこのような概念に基づいている。

3.2 授業外学習を要求する評価活動

筆者らは、受講学生のスペイン語運用能力の獲得に必要であるという認識と、十分な授業外学習時間をスペイン語学習への取り組みに当てるためのインセンティブとする意図も合わせて、以下のような多様な評価活動を授業に組み込んでいる。

英訳テスト
朗読テスト
動詞変化形暗唱テスト
音声産出形式語彙テスト

ディクテーション・テスト
ビデオ応答形式対話テスト
母語話者との対話形式テスト
スペイン語検定試験模擬テスト

それぞれの活動の具体的な内容と意図されている授業外学習活動については次ページ表1に示した通りである。

これらの評価活動は教師にとって少なからぬ負担となるが、学生が授業外で担当科目に関連する学習に積極的に取り組むことを意図するのであれば、教師自身も労力を厭わず、学生が授業外で行なっている学習活動に関わっていく必要がある。このような活動の継続的な繰り返しが、学習の質を高め、ひいては授業の質の向上につながる。

3.3 授業外学習時間を増やすための足場がけ

ただ授業外学習時間を増やせと促しても、その方法が分からなければ学生たちは困ってしまう。学生たちの取り組みを支える足場がけ (scaffolding) も重要である。この観点から筆者らが実践していることを以下に簡単に紹介する。

3.3.1 学習時間が鍵となることの説明

学期開始時に外国語の運用能力を習得するためにはどのように取り組むべきか、について説明しているが、その際に目標言語に身をさらすことの大切さを強調している。毎日取り組むことや練習量が鍵となることを、スポーツでも練習の積み重ねが重要であることを例に挙げながら説明している。

また毎月末にその月に取り組んだ授業外学習の内容と総時間数に関する報告を提出させ、コメントを付けて返している。また授業外学習の総時間数を最終評価に組み入れており、時間数を増やすよう折にふれて授業内で促している。

3.3.2 授業外学習のメニューに関する指導

どのような学習活動を行えばよいか指導することも重要である。特にスペイン語の音声に触れることの重要性を繰り返し伝え、授業外で必ず声に出して教科書

表1 授業外学習を前提としたさまざまな評価方法

評価形式	内容・ねらい	前提とされる授業外学習
英訳テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・主教材のスペイン語ビデオ・スクリプトの一部を抽出し、授業内で英訳。 ・適宜、スペイン語テキストに変更を加え、内容を学習目標により合致させ、英訳の暗記などを防止。 ・英語の既得知識をスペイン語学習に援用しながら、スペイン語テキストに取り組むことを促進。 ・理解しにくい箇所の認識。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業外で事前に、スペイン語教材ビデオ・スクリプトのテキストに取り組み、語彙学習を含め、テキストの理解を進める。 ・英訳することで英語に関する知識を援用し、スペイン語と英語の共通点と相違点に注目しながら、スペイン語の文や談話の構造、語彙や表現、時制の概念や形態変化規則について学習する。 ・内容理解のためには、状況設定が分かるビデオの視聴も必要。
音読テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・主教材のスペイン語ビデオ・スクリプトの一部を授業内で音読し、録画して提出。 ・教師が視聴して採点。発音の改善点を指導。 ・スペイン語のモデル音声の繰り返し視聴による多量の音声インプット。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業外で事前に、スペイン語教材ビデオのモデル音声を繰り返し聞き、それを真似て音読あるいはシャドーイングを行う。 ・聴解能力、発話能力の基礎訓練。 ・音声を重視した学習方法への馴致。
動詞変化形暗唱テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・スペイン語基本動詞の直接法現在・過去時制、接続法現在時制などの人称変化を授業内で暗唱し、録画して提出。 ・教師が視聴して採点、アクセントなどの注意点の指導。 ・スペイン語運用能力獲得に不可欠な動詞形態変化の理解と基礎訓練。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業外で事前に、スペイン語基本動詞の法・時制・人称による形態変化を暗唱。 ・スペイン語の基本的特徴を、継続的に体感。 ・授業内でのスペイン語によるやりとり活動や読解、作文に向けた基礎訓練。
音声産出形式語彙テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・例えば数や時間表現などの基本語彙や基本表現について、授業内で課題の指示を見て発音し、録画して提出。 ・教師が視聴して採点。 ・語彙を文字のほか音声イメージとして習得。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題として指示された語彙や表現について、授業外で事前に ISTU 上の音声モデルを用いるなどして発音する練習を行い、音声的に産出できるよう訓練。 ・音声レベルで産出できる語彙知識の獲得。
ディクテーション・テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・教材ビデオなどの音声素材を授業内でディクテーションして提出。 ・音声教材への取り組みの促進。 ・入力音声に基づく積極的な意味再構築活動としてのリスニング能力の訓練。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業外での教材ビデオ視聴訓練。 ・リスニング上の弱点の認識と克服に向けた学習法の模索。
ビデオ応答形式対話テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内で、さまざまな質問を発する課題ビデオを視聴しながら、これにスペイン語で応答し、その様子を録画して提出。 ・やりとり能力の養成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業外で事前にこのテストの準備のために作成された ISTU 上の練習用ビデオの視聴および応答練習。 ・リスニングとスピーキングの能力が同時に複合的に要求されるやりとり活動の訓練。
母語話者との対話形式テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・授業内で、母語話者と 1 対 1 の形式での対話テスト。 ・一定の条件内での対話能力の測定。 ・「話す能力」を重視した指導の集大成。 	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな教材を用いた訓練の繰り返しによる準備。 ・真正な状況に近い設定でのスペイン語運用能力測定に向けた総合的な学習活動。
スペイン語検定試験模擬テスト	<ul style="list-style-type: none"> ・スペイン語標準検定試験 DELE 対策問題集の問題への取り組み。 ・授業で扱う範囲を超えたスペイン語との接触。 ・スペイン語学習の全体像の把握。 	<ul style="list-style-type: none"> ・4 技能にわたる多様なテキストへの取り組み。 ・問題形式に応じた多様な学習形態。 ・将来の受験に向けたイメージの獲得。

を読むことを勧めている。聞いて答える、あるいは話す練習をする学習教材を教えておく。スペイン語を日本語訳にしてくる学生もいるが、それよりは音読したり英語訳をすることを勧める。以前は、日本語での文法説明のノートを提出してくる学生がそれなりにいたが、最近では皆無である。外国語学習の練習メニュー内容の方向性について助言し、従来からの外国語学習の中で固定化した学習スタイルを見直すきっかけを提供することも教師の重要な役目である。

毎学期開始時にはインターネット上にあるスペイン語学習教材のリストを作成し配布しているが、その際に教室で一度それらの教材を見せておくことが重要である。授業で一緒に見ておくことで、学習者の教材への興味を喚起することができる。

また学生同士で情報を共有させることも重要である。過去に受講学生が行なった学習法を紹介し、ヒントを与えるようにしている。通学時間にスペイン語音声教材を聞く、週末にスペイン語圏の映画を見たり料理のレシピを探して作ってみるなど、スペイン語漬けになるためにこれまでの学生たちが編み出した方法を伝えることで、学生たちは授業外学習の具体的なイメージを持つようになる。また、学生たちが面白く学習できる教材をインターネット上で見つけて報告して来ることも多く、それを全体でシェアするようにしている。

3.3.3 授業外学習の総時間を増やす工夫についての助言

外国語の学習に集中できる時間はそう長くないので、集中が必要な学習だけではなく、スペイン語に触れる時間そのものを増やすにはどうしたらよいか、模索することも勧めている。自分が好きなことだと時間を忘れるので、自分の好きなことをスペイン語学習と関連づけてみるように助言している。「嫌いなことはやりたくないよね。好きになったらたくさんやれるよね。」と話しながら、そのような心理的側面の説明を加えることも重要である。あらゆる機会を捉えて、スペイン語に触れる時間を増やすように仕向けていくのである。

趣味に費やす時間もスペイン語と関連づけることが

可能である。スペイン語圏の芸術の展覧会があれば見に行く、スペイン語圏の音楽のコンサートがあれば聞かに行く、スペイン語圏の料理を出すレストランがあれば食べに行く、好みのスペイン語圏の音楽を探す、スペイン語圏をテーマにした旅行番組を見る、日本のアニメをスペイン語で見る、など学生それぞれの好みにあった活動を見つけ出すことは必ずしも難しくはない。

ただし、自分の趣味に合わせた取り組みであっても、スペイン語学習の観点から注意すべきことがあれば助言することも重要である。例えばアニメのスペイン語版のセリフは難しいことも多いので、自分がストーリーを知っているアニメを見るよう助言している。また、音楽についてもスペイン語の歌詞の探し方などを教えておく。このような方法でスペイン語に多く触れるようになった学生はスペイン語そのものに興味を持ち、学習時間が増加することも多い。

スペイン語圏の映画を見たり、音楽を聞いたりした感想が授業外学習報告にあった時には「あの映画面白いよね」といった肯定的なコメントを返し、スペイン語圏の料理を作った時の写真を提出してきた時には「現地に行って実際に食べないとね」とコメントを返すなど、学生の取り組みを一層鼓舞していくことも欠かせない。

筆者らの指導する学生たちは押し並べて、趣味に関する活動にも真面目に取り組む傾向があり、楽しみながら学習に取り組む姿勢を身につけることで、学習効果も増していると言える。授業外学習に関しては教師自身が固定観念を取り払っていく必要がある。

4 授業外学習時間の確保に向けて

上述のとおり東北大学全学教育科目の授業で東北大学学生が授業外で取り組んでいる学習時間は、東北大学の認定している単位が前提としている学習時間に対して明らかに不足している。端的に言えば、東北大学は学習時間不足のまま単位を認定しているということであり、単位制の根幹が問われる。東北大学の認定した単位が国際的な通用性を持たないと判断される事態も予想され、大学として強い危機感をもってこの問題に対処していく必要がある。

その際に重要なことの一つは、学習者の学びを中心に据えた指導 (learner-focused teaching) の重要性を改めて認識することである。自分の講義、自分の授業にばかり意識が向いている間は、学習者の学びについての配慮は後回しになる。「私が教えたことを理解するのが学生の義務だ」と考えている間は、授業外学習時間への関心は生じない。「学生は私の話を聞いていればよい」ということになってしまう。

学習とは学習者の脳の変化であると理解する立場⁸⁾に立った場合、教師の講義を聞くだけで十分な脳の変化が生起するとは考え難い。ましてや多くの長期記憶の生成を通した多様な手続き知識の獲得を必要とする外国語の学習においては、教師の話を聞いたり、限られた分量のいわゆる練習問題を解いているだけで外国語ができるようになることを期待することはできない。

筆者らは、指導する学生たちがスペイン語の運用能力を身につけるようになるという目標を常に念頭に置き、できるだけスペイン語に接することこそが目標達成の最善の手段であるという信念のもとに指導を行ってきた。

東北大学の全学教育スペイン語教育では現在、1年次対象の基礎スペイン語修了時にCEFR A1レベル、2年次対象の展開スペイン語修了時にはCEFR A2レベルのスペイン語運用能力を獲得することを目標として設定している。このような目標を達成するためには、学生それぞれが授業外でも十分な時間をかけてスペイン語の学習に取り組むことが不可欠である。

また最近、3年次後期からスペイン語圏の大学に長期の留学をすることを希望する学生が増えているが、その場合には留学希望先大学への出願を行う2年次修了時点で国際的な留学生受け入れの最低限の指標であるB1レベルの能力を獲得しておくことが求められる。となれば、ますます授業外での学習時間の確保は重要性を増す。

一定レベルのスペイン語能力を限られた期間の中で獲得するには授業時間と授業外学習時間を合わせた学習時間を増やしていくしかないのであって、授業外学習を促進し、サポートしていくことは担当教師の役目として今後、さらに重要性を増していく。

このような状況は、スペイン語以外の言語の教育や、

外国語教育以外の分野の教育でも同様である。授業外での学習を促進し、これをサポートする能力が、大学教師にとって不可欠の特性として今後ますます認識されていくものと筆者らは予想している。

注

- 1) 本稿では引用箇所以外では「学修時間」ではなく、より一般的と思われる「学習時間」という用語を用いる。
- 2) 文部科学省. “トップ > 教育 > 大学・大学院, 専門教育 > 大学における教育内容・方法の改善等について > Q3 日本の大学の現状について, 「授業に出席しなくても単位が取れる」「勉強しなくても簡単に卒業できる」などの声を耳にしますが、これについて大学はどのような対策を講じているのでしょうか.”, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/003.htm, (2017-11-13)
- 3) 現行の大学設置基準は以下のウェブページに記載されている。総務省. e-Gov法令検索. 大学設置基準. http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=331M50000080028&openerCode=1, (2017-11-13)
- 4) 東京大学大学経営・政策研究センター. “全国大学生調査”. <http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat82/post-6.html>, (2017-11-13). 本調査の概要と分野別の集計がpdfファイルで掲載されている。
- 5) 以下のウェブページで東北大学全学教育について平成17年度以降実施されてきた学生による授業評価アンケート実施結果報告書が最新版まで公開されている。 http://www2.he.tohoku.ac.jp/zengaku/zengaku_eq.html, (2017-11-13)
- 6) 実際には筆者らが担当する授業の受講学生の中には週3時間以上の授業外学習を行なっている学生も少なくない。また講義科目の場合には週4時間以上の授業外学習時間を前提としている場合が多い。その意味でこの設問に対する選択肢が3時間以上を最高位としていることには今後検討の余地があろう。
- 7) 例えば東京大学大学院情報学環・反転学習社会連携講座ウェブサイト. “学びの時間と空間を組み替える”. を参照。 <http://flit.iii.u-tokyo.ac.jp/index.html>, (2017-

11-13)

- 8) 学習を脳の変化として捉える立場を明確に主張している研究者として小泉英明が挙げられる。そのような立場からの学習及び教育の定義は例えば以下のインタビューに示されている。ベネッセ教育総合研究所. 2005. “脳科学から見る教育課題の本質”. BERD, No. 1. p. 27. http://berd.benesse.jp/berd/center/open/berd/2005/06/pdf/06berd_04.pdf, (2017-11-13)

引用文献

- 中央教育審議会. 2012. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）平成24年8月28日. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm, (2017-11-13)
- 東北大学学務審議会, 高度教養教育・学生支援機構教育評価分析センター編. 2016. 第1回東北大学教員の教育活動に関する調査報告書. <http://www.cir.ihe.tohoku.ac.jp/sys/wp-content/uploads/2016/12/7e85e95fc74838falbc8f750d7cac153.pdf>, (2017-11-13)

